

第1章 事業概要



水展 中項目パネル

宇宙では水はありふれた物質です。しかし、星の表面に液体の水が存在する星はこれまでに観測されたことがなく、地球は類い稀な星といわれます。地球では、水は気体(水蒸気)・液体(水)・固体(氷)と三つの状態に変化でき、このことによって水の循環が成り立っています。

第1章 事業概要

1. 社会教育活性化 21世紀プラン

本事業は、社会教育施設が地域のニーズに応え、地域の課題解決に貢献することをめざして、ソフト面の支援を行う文部科学省の事業である。完全学校週5日制の導入への対応、奉仕・体験活動の推進・家庭教育への支援、民間の能力の活用など、社会教育分野における現代的な課題への対応、国民の多様な（新しい）サービスに応えるため、社会教育施設が中核となり、様々な機関と連携するなどにより様々な事業を実施し、地域における社会教育の活性化を図るためのものである。

「子どもとつくる博物館事業」による博学連携のための社会教育、特に環境教育推進事業
子どもたちの学びを支援するために、小学校と連携し、身近な素材である水をテーマとする展示事業を、子どもたちの参画を得て、企画・実施する(図1)。

平成16年度 事業実施

平成17年度 事業実施・評価

2. 千葉県立中央博物館の現状

千葉県立中央博物館本館は「房総の自然誌」、「房総の歴史」、「自然と人間のかかわり」をテーマに6つの展示室と、体験学習室、さらに房総の植物群落を復元した「生態園」を有する総合博物館である。研究職の職員61名(分館を含む平成17年4月1日現在)を有し、フィールドでの調査研究と収集した資料による研究の一体化を目指す研究型博物館である。分館海の博物館が千葉県勝浦市に設置され、房総の山のフィールド・ミュージアム

プロジェクトが君津市清和県民の森で展開されている。生態園では、「森の調査隊」という自然体験プログラムを実施し、成果を上げている。さらに、分館海の博物館や房総の山のフィールド・ミュージアムプロジェクトでは、地域の自然を利用した活動を地域の人と一緒に実施している。

3. 千葉県立中央博物館の課題 - 学校連携 -

平成10年に実施した学校団体のアンケート結果から、参加型の展示や体験学習の機会提供が望まれていることがわかった。生態園や分館海の博物館や房総の山のフィールド・ミュージアムプロジェクトのような現地型の博物館活動に加え、本館展示においても、子どもや先生のニーズにあった展示、特に体験型の展示を企画開発することが必要である。

今の子どもたちは、テレビ等で素晴らしい映像を見慣れ、しかも知識としては多くのことを知っているが、身近な自然や日々の暮らしの中にある不思議さを自ら発見して、ワクワクするような体験をしているのであろうか。学校教育において総合的な学習の時間等で、体験を通じた学習の重要性が強調されているが、身近な地域の自然をドキドキと学ぶような仕掛けが学校だけで十分に満たされているとは言えないだろう。近代化により、暮らしの中で自然とのかかわりが希薄になった現在、ワクワクするような発見の喜びの場と機会と大人の支援を子どもたちに提供することが、当館のような自然誌を中心とする博物館の新たな使命になっている。

また、学校教育と社会教育施設である博物館が協働して、子どもたちの学びを支援することが社会から期待されている。そのためには、課題解決のために、目的を共有し、学校教員と博物館職員がお互いの経験と知識を交流させることが必要である。

本事業において、学校と連携する際に生じたさまざまな事象から、博学連携のために必要な事柄を明確にして今後の事業の参考に資する。

4．平成16年度事業¹⁾

(1) 社会教育活性化推進委員会を3回開催し、モデル事業を実施した。

(2) モデル事業

- ・子どもの水体験アンケート調査
- ・モデル学校4校との連携による子どもたちの学びを支援する活動実施
- ・子どもの水についての疑問調査
- ・モデル学校1校との発展的な連携事業
- ・水学習キット開発制作
- ・子どもたちの評価(プレ展示開催)を受けて、学習キット等の見直し

5．平成17年度事業

(1) 社会教育活性化推進委員会を2回開催し、モデル事業を実施した。

(2) モデル事業

- ・平成17年度企画展「ワクワクたいけん 2005 旅する地球の水(以下水展)」における評価
- ・水環境教育啓発ポスターの制作
- ・事業評価

6．次年度への発展

この事業の成果を活かして、平成18年度には環境教育推進事業の一環として、水環境教育プログラムとそれに関わる教材を広く学校に提供する予定である。

また、本事業の成果報告書(中間報告書・本報告書)、水展ガイドブック、水環境教育啓発ポスターを当館ウェブページ²⁾に公開して、水環境教育の推進に寄与したい。

7．博学連携

学校団体の要望に応じて博物館が情報と人材等を提供する連携事業はこれまでに多くの博物館で実践がなされている。本事業は、子どもを対象とする企画展示の実施のために、子どもたちの体験や疑問を基本として、さらに子どもの評価を受けて、展示物および体験型展示の改善を行うものであった。子どもたちの協力を得て博物館事業(展示)を実施する取り組みは新しい試みといえる。

本事業は連携した小学生の学びに役立ったのか、さらに一般来場した子どもたちにとって教育的効果があったのか、それについて検証した。

本事業推進のための社会教育活性化推進委員会には、4校の小学校、中学校、高等学校、大学の職員、さらに環境教育活動に携わる市民に参加していただき、目的を共有し、学校教員と博物館職員がお互いの経験と知識を交流させる機会となり、学校と市民と博物館が協働することができた。このなかで、お互いの信頼関係ができ、本音の議論もできるようになった。博学連携に関する考察を第2章に後述する。

8．展示事業評価

企画展を開催するにあたり、対象とする小学校高学年の水経験や水に対する興味・関心を調査し、博物館として伝えたい主題とのバランスをとりながら、博物館の表現手法である「展示」を制作した。このプロセスが、「企画段階評価」となった。

水展制作に関しては、プレ展示を行い、子どもたちの評価による「制作途中評価」を実施した。プレ展示および本展示中、毎日水展ボランティア(後述)の反省会を実施し、そこで指摘された問題を解決し、「修正的評価」を行った。

さらに、「総括的評価」として、水展ボラン

ティアによる展示検証とアンケートによる来館者評価を行った。これらの評価結果に加えて、批評的評価と一般来場者の感想を第3章で報告する。

9. 環境教育推進

(1) 水環境教育

本事業では水、特に水循環をテーマに取り上げた。水は身近な物質であり、命に欠くことのできない大切な資源である。ところが、日本において水は、川・湖沼・海、また雲や雨・雪など誰でも容易に観察できるあたり前の資源であるため、関心は低いだらうと考えていた。しかし、学校での授業やプレ展示を開催し、子どもたちや来館者の様子から、水については潜在的な関心が高いことがわかった。

身近であるが、実は不思議な性質を有する水をきっかけにして、子どもたちが身近な自然のなかで不思議だなと思う科学の心を育むことを水展の目的とした。また、地球の生態系において、全てに関連している水を通して、総合的・連関的にものごとを理解できるよう

になりたいと考えた。

情報を一方的に伝えるのではなく、子どもたちが、体と心を動かして、自ら発見するよう体験型展示を中心に水環境教育プログラムを開発した。

(2) 水展ボランティア

体験型展示により発見を促すファシリテーター³⁾の役割りを市民(水展ボランティア)に担ってもらうことができた。博物館という場が、子どもと大人の交流を促す機能をもつことの大きな可能性がみえた。水展ボランティアの学びを第4章で紹介する。

(小川 かほる)

引用文献および注

1) 小川かほる編(2005)「子どもとつくる博物館事業」による博学連携のための社会教育、特に環境教育推進事業中間報告書、千葉県立中央博物館 (ウェブページにて公開予定)

2) 千葉県立中央博物館

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

3) ファシリテーターとは、参加者の気づきや理解を促進する人のことであり、参加者と対等な立場で、参加者の主体性(意欲・知識・

経験等)を上手に引出し、コミュニケーションを円滑に促進していく役割を担う。

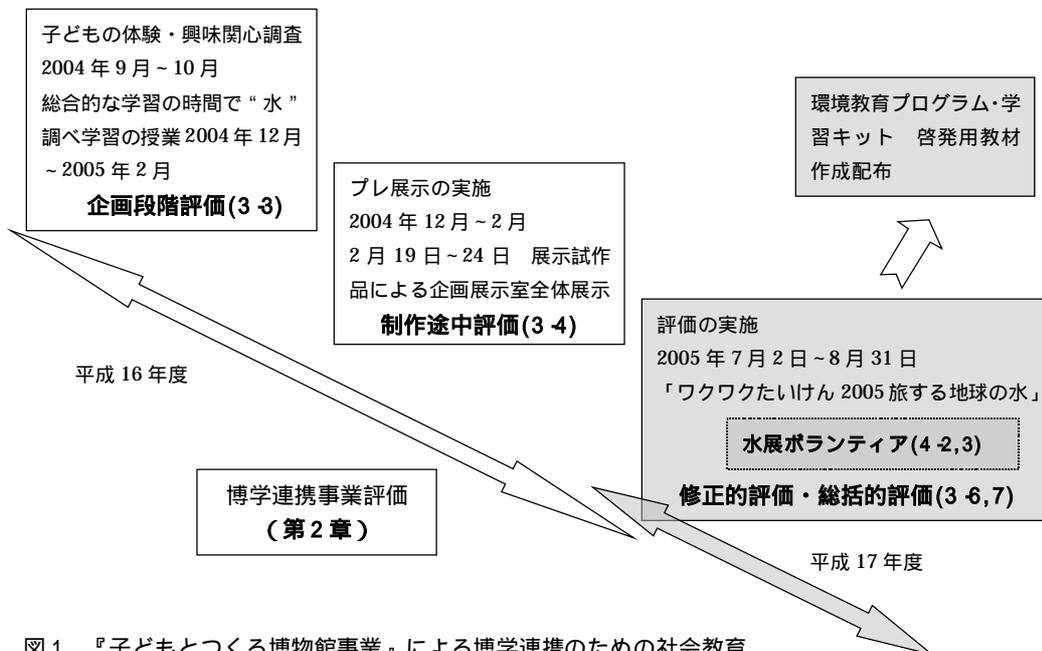


図1 『子どもとつくる博物館事業』による博学連携のための社会教育、特に環境教育推進事業フロー